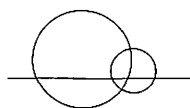


〔講演会〕



本間喜一がつかないだ東亜同文書院大学と愛知大学

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

【司会】 それでは皆様大変お待たせいたしました。定刻となりましたので、講演会後半部、愛知大学文学部教授でありそして東亜同文書院大学記念センター、センター長の藤田佳久教授より、「本間喜一がつかないだ東亜同文書院大学と愛知大学」という題でご講演をいただきます。では藤田先生、よろしく願いいたします。

【藤田】 皆さんこんにちは。だいぶお疲れだと思いますけどもう一頑張りお聞きください。ただいまご紹介いただきました、私愛知大学の東亜同文書院大学記念センターのセンター長をやっています。当センターはだいぶ前に発足してはるんですけど、今年で5年目です。文科省の特別の学術高度化資金をいただきまして、われわれの活動を多くの人に知っていただき教育研究事業に生かすという目的で最後の5年目を迎えました。その中の1つのプロジェクトとして、全国の方々にも東亜同文書院の存在というものを、愛知大学だけではなく広く日本の1つの財産として知っていただきたいということで、これまで各地で講演会や展示会をこういった形でやってまいりました。一番最初は横浜でやりました。全国図書館展と共催ですけど、全国の中から大学としてその時初めての出展となりました。愛知大学を横浜の会場の真ん中に据えていただきまして、入場者が25,000人ほどおられました。大変な数の方々に書院のことを知っていただきました。それから東京で開催し

ました。東京には東亜同文書院の経営母体の東亜同文会があります。その会長であった近衛篤磨公の雅号である「霞山」を生かして霞山会と申します。それが文科省のすぐ隣にビルがあったんですけど、それを取り壊して、このたび国と民間が文科省の隣に大きなツインタワー、37階建てのビルを2つ作りました。その上のほうの4階分を霞山会が持つてはるんですけど、その一角に愛知大学の東京事務所が移りました。すぐ下に皇居が丸見え、国会議事堂も丸見えであります。ぜひ東京へ来られたら1度お寄りいただけたらと思います。

それからあと福岡。九州の方はずいぶん書院の卒業生が多くて、そういう企画があるならやってほしいという要望がございまして、九州のほうでもいたしました。あと神戸でもやりました。それから書院の卒業生で孫文の実質的な秘書をやった山田兄弟、特に弟さんの山田純三郎という方がおられます。この方の出身地は青森県の津軽、弘前でして、山田純三郎を中心にして展示を行ないました。若くして中国へ行かれた方なので、お年寄りの方はご存じでしたけれども、中年以降の方は初めて聞く名前でした。しかしどんな方だろうというわけで多くの人達が集まっていたいただきました。興味のある方が来ていただいて大変ありがたかったです。それから海外でもやりました。昨年の3月、アジア学会という、アジアという名前が付いてはるんですけどもアメリカに本部があり、やっぱりアメリカというのは情報が全部集まるよ



うになってるんですね。ほんとは日本あたりにセンターがあったらいいんじゃないかなと思うんですけど。そちらから声がかかりまして、アメリカのシカゴで3月に展示会と、シカゴ大学での講演会をやりました。今年は先日京都でやりました。予約したい会場はどこもいっぱいだったんですけども、あるホテルのホールが1か所あいていました。気がついてみれば京都の祇園の真っ最中の時期でした。これはえらい時にやるということになりましたけれど、でもいろいろ関心のある方がお見えになっていただきました。また、併せて今から出てまいりますけど荒尾精という、最初に東亜同文書院の構想を抱いた方、その方の慰霊碑も行なうことができました。荒尾精という方は愛知県の尾張の出身なんですけれども、のちに京都にお住まいになっておられた。そこに祀った碑がございます。

今年はずいぶん本間先生の時代の愛知大学、本間先生のご出身地であるこの置賜の地、米沢ですけども、ここで展示と講演会の開催をしたいという計画でプロジェクトを進めて参りました。しかし先ほどお話がございましたように比較的早く東京へ出られた方ですから、地元の方で本間先生のお名前を知ってる方が少ないということ、ご当地へ今から3週間ほど前、うちの有能なスタッフの山口さんと一緒に来た時に初めて知りまして、すぐ2人で市内と川西町など10数か所いろいろ回りましてP.R.をさせていただきました。その中で今日お見えになっている米沢日報社長の成沢さんが非常にわれわれに協力していただきまして、一生懸命ご努力をいただきました。あと山形新聞社とか米沢新聞、商工会議所であるとか、伝国の森博物館であるとか、それから川西町の教育委員会も出かけました。ついには本間先生のご実家の小池さんのお宅までお邪魔して、山田先生とも一緒になり、いろいろ教えていただきました。そういうわけでいつの間にか本間先生を訪ねながらわれわれも米沢、置賜の中に入っていったという経

験がございました。今日最初のほうで学長が本間先生の胸像を地元の方にお贈りするということになったのも1つの成果ですけど、特に米沢日報の成沢さんのご努力が非常に大きかったということをお知らせしておきます。今日は参議院議員の渡辺さんもお見えになっております。渡辺先生と申し上げたほうが……。大変これも光栄でございます。よろしく願いいたします。

というような経緯がございまして、実は今年は5年目のプロジェクトが最後なので、今度は一番最後に名古屋で最後のまとめをしようというふうに計画しております。名古屋にもわれわれの校舎がございまして、そのホールでやる予定だったんですけど、名古屋には松坂屋の本店に卒業生がたくさんおられて、やるならうちでやってくれということで、名古屋の松坂屋で11月の下旬に3日間やることになりました。東亜同文書院にしましては書院の卒業生、それから先ほどの霞山会、それから愛知大学ですね。特に書院の卒業生は個人の方が非常にたくさん寄付していただきまして、基金会というのを作って、その会員の方がたくさんおられるわけですけど、その基金会で毎年われわれのほうで書院とか中国研究に功績があった方に授賞式で表彰させていただいています。2年ほど前は工藤美代子さんという方で、近衛文麿の問題を扱われました。書院の院長もされまして、のちに総理大臣になられた近衛文麿さんが東京裁判の前日になぜ自ら命を絶ったかというテーマです。その他にもいろんなテーマがあったんですけど、その方に名古屋へ基調講演に来ていただき、というようなことを考えております。

本日、私はこういうテーマでやりますが、せっかくの機会ですので、じゃあ本間先生が最後の院長であった当時の旧制大学、学長であった東亜同文書院というのはいったいどんな学校であったのかということですね、このことを皆さん方にぜひ知っていただくと、ああ本間先生はこういう学校で最後うまくまとめられたんだなということもお

分かりいただけると思います。その先の愛知大学は現在われわれのほうの学校でありますけど、それも少し最後のほうでお話させていただいて、併せてご理解いただければと思います。今日的な愛知大学についてのお話は最初に学長がご案内させていただきましたので、その辺は皆さんご理解いただけたと思います。今日は画像を中心にしてお話をさせていただきます。

これが東亜同文書院の正門の像です。これは上海の絵葉書からです。下のほうは右側から上海東亜同文書院。東亜同文書院は戦前日本の方はもちろんですけど中国の方々にも注目される学校でした。戦後は米ソの冷戦時代になりまして、中国も共産主義の国になって、イデオロギー的にいろいろ厳しい発言がありまして、東亜同文書院というのはまさに日本のスパイ学校、帝国主義の先兵であるというようなことで一蹴されてきました。しかし最近ガラッと変わりました。日本の最高のレベルの学生が集まって調査研究等をやった学校だというような本が堂々とするようになりました。そういう点でも中国の変わり方が少し分かります。

校舎が全部で4回移り変わりますけど一番最盛期はこの3度目の時です。約6万坪ぐらいの敷地を得て東亜同文書院を作りました。その前は中国が非常に不安定な時代でした。孫文が始めた反清運動により辛亥革命が生じ清朝の時代から中華民国へと変りましたが、軍閥がいつぱい出てきて戦争がずーっと続きました。したがって1回目の校舎、2回目の校舎はみんな向こうの戦争の弾が当たって焼けてしまったんです。3回目は今度は思い切り奥の西の外れ、当時はフランスの租界とかイギリスや日本の共同租界がありましたけど、租界の外に学校を作り、なるべく中国の社会に触れさせようという1つの大きな考えがあったと思うんです。ところが第2次上海事変、1937年、日本軍が上海へ上陸してその時逃げる中国兵が租界の中には入れませんから、外側へ逃げるルート上

に書院があったんですね。膨大な中国各地の調査資料の生原稿、10万点を超える各地から集めた商品見本、もちろんそれだけじゃありません、図書その他いろいろありますけど、それがみんな焼かれてしまったんです。燃えてるといって写真が残っています。それは大変残念なことでした。

これはじゃあどうなったのかと言うと、すぐ隣に上海交通大学というのがございました。その始まりは南洋公学と言いました。北のほうは北洋公学で中国では最初の学校です。これが中国の2大大学の始まりです。その南洋公学が上海交通大学、交通というのは当時鉄道技術です。で広く言う工学部、こちらには山形大学の工学部がございまして、そういういわゆる工学部の学校がございました。そこが戦争が激化したために避難民の居住地になったのです。大学の人達は租界の中とか内陸奥地のほうに疎開してました。その避難民の跡を借用して、残り終戦までその校舎で東亜同文書院大学の存続をしたわけなんです。本間先生はその下でご苦労された。この時代は本間先生はおられませんでした。そのあと、最後のほうのところで本間先生が、ある意味では一番の逆境の時に登場し力を発揮された。本間先生がおられなかったら書院がそのあと愛知大学に引き継ぐ形でうまくいかなかったらと思うんです。そういう点でも愛知大学にとって本間先生の存在は非常に大きい。今日われわれがこういうお話ができるのも、本間先生のおかげであるということがはっきり言えます。

これはキーパーソンとして、東亜同文書院を作った3人の方々です。一番左側が近衛篤磨、明治の時の貴族院の議長をやられた方です。若い時にオーストリア、ドイツで留学をされました。中国は日清戦争に敗れ、その前から列強の支配を受けて半植民地状態になっていました。このまま行くと日本も危ないのではないかと。そこで中国と提携することでアジアを強化したらいいんじゃないかというわけで、それには中国との貿易と教育・



文化の交流だと。その2つの交流をやってお互いの国を強化する。何となく今の時代とちょっと似てるところがあります。最近の中国はかつての日本の高度経済成長時代を思わせるような勢いがございませうけれども。そういうことを提案して東亜同文書院を具体化し、その場所を南京に求めたんですね。ところがいよいよオープンしようと思ってスタートしましたら、義和団の乱が起こって上海へ移動し、上海に東亜同文書院が開設されたわけです。この方は非常に優れた方だったんですけども、ヨーロッパから帰る時にアフリカとかインドとか中国とか各地を回って帰ってこられたので、日本へ帰ってしばらくしてから熱病と言いますか、身体中から膿が出る病気にかかりました。当時のトップクラスの医師団が治療に当たったんですけどその病に対処できなかったというわけで、40歳になってですかね、亡くなってしまいました。それは非常に残念なことでした。

それからその前、10年歴史が遡りますが1890年に荒尾精という方が、まだ日本人が知らない中国へ行って、あとで出てくる岸田吟香という方にサポートしてもらいながら中国の漢口（揚子江の中流。中国中の文物、情報が集まる）へ行って、一生懸命中国の情報集めをしたわけです。当時日本から来る若者が時々いたのでそれを捕まえて、即座に教育して、お前は北のほう、西のほう、南のほうで中国の貿易可能品などの様子を集めてこい、ということをやったんですけど、みんな行方不明になってしまったりして、そんな態勢では中国の実情がよく分からないということが分かったのです。そこで、後に日清貿易研究所というのを、書院ができる10年前に作るわけです。150人の学生が上海へ行きました。ところが5年後に日清戦争が起こったので、ストップせざるを得なくなった。しかしそれが終わった後、きちんとして学校を作らなくちゃいけないという形で東亜同文書院の構想を提案した方です。

そしてこれはその友達、親友関係にありました

根津一という方です。この方が書院の院長になりました。荒尾精もほんとに若い元気な方だったんですけど、台湾へ渡ったあとペストにかかって2日で亡くなってしまいます。ペストってのは怖いですね。皆さんも成田とか羽田とかに帰ってくると防疫のチェックをするところがあって、そこにはペストというのが必ず出てますね。今もまだペストが残ってる。かつて中世ヨーロッパでは黒死病（真っ黒になって死んでしまう）と言って、犯人は魔女だというわけで魔女狩りをしたという歴史があります。それにかかって亡くなってしまった。指導者を相次いで2人、若くして失って大変損失が多かったけれども、この根津院長がその分非常に頑張ったわけでありまして。これが根津院長です。それからあとの院長は杉浦重剛とか大津麟平、ここで近衛文麿ですね。先ほど申しました。このあとから大学へ昇格します。中国にあって日本の大学になったなんていうのはちょっと奇異な感じがしないでもないんですけど、まあ民間の学校として文部省が認めたんですね。矢田院長、そして最後が本間院長であります。

これは先ほど申しました岸田吟香の、若い時と年をとった時の像です。この岸田吟香という人は岡山県の山の中の出身ですけど幕末に江戸へ出てきて猛烈に勉強して目を悪くした。ちょうど明治維新直後で、横浜に外国人がやってきており、ヘボン（ローマ字記述方式の）が目医者さんだということで彼に目を治してもらった。その時に吟香の多彩な経験と才能が見抜かれて、英語と日本語の辞書を作ろうということになり、そういう勉強をしたわけです。しかし日本に活字がないから、上海へ行って活字を作った。その時技術を教えてもらった目薬を売って大儲けをします。日本の国際商人第1号であります。この方が上海で活躍していたので先ほどの荒尾精が彼を頼って行って、スポンサーになってもらったわけです。そういう点では非常に大きな意味を持っておられます。日本へ帰ってから初めて横浜日日新聞という新聞を

出します。日本の新聞史上でも欠かせない人物なんです。この息子さんが岸田劉生という方で、よくこういう絵をご覧になった方があると思うんですけど。そのお弟子さんが本学のロゴを作った高須さんという方で、豊橋で大きな本屋さんをやった方です。そういう点で愛知大学は吟香以来の歴史がある意味では続いていると言えます。

昨日も上杉神社等へ行きましたら、まだ今年の雰囲気が残ってまして、どこへ行っても「愛」という字がたくさんございました。われわれ愛知大学におりますと、「愛」という字を見ると何となく親しみを持つところがございます。さっきのロゴなんか「愛」というのがあります、ちょっと共通するところがございます。これは先ほどの荒尾精が中国で情報を集めた成果です。本屋さんをやった本から学んだんですね。その時の作品が日清貿易を中心にした実務書を出すわけですけど、その中に書かれた地名を地図上に示しますと、ほとんど中国全土の情報が集まっています。この本は2,000頁もある大きい本ですけど、初めて日本人が中国の実像に触れた本です。それまでの日本人は漢詩漢文でしか中国を知りませんでした。漢詩漢文はインテリの人達が美しく上品に、やっぱりインテリ風に詩を作ったり文章を作ったりしますから、現実世界からは逃避しています。その美しい世界を日本人は読んでいたわけですから、中国は素晴らしい国だというふうにみんな思ってた。しかし幕末に高杉晋作が、当時外国へ行っちゃいけないのに密航して上海に行きましたね。上海の実状を見てびっくりして帰ってくるわけです。このままでは日本も植民地になってしまうかも知れない。というようなことがあって、薩長土肥の背景の1つになっていくわけです。

当時日本政府は、若き指導者達を船でアメリカからヨーロッパに2年間かけて視察をさせます。各地で大歓迎を受けるわけです。アメリカでもイギリスでもドイツでも。これはどういうことかと言うと、明治維新の頃は日本はイギリスとフラン

スとその背後で操ってた。坂本龍馬の存在が非常に評価されてますけど、むしろ植民地化を狙ったイギリスとフランスが幕府や薩長のあとにいてそれぞれ争っていた。そういう時に若い人達がヨーロッパへ行った時の大歓迎というのは、お互いが日本を自分のものにしようという考え方が背景にあったと思うんです。ところが自立が何でできたかと言うと、その時ロシアの南部のクリミアで戦争が起きました。ナイチンゲールが活躍した戦争で、イギリスもフランスも兵力をそっちへ取られて、日本と朝鮮が空白になった。それでかろうじて日本は独立を守れたわけです。だから坂本龍馬が直接独立させたわけじゃない。そういう国際関係の中の一瞬の隙で日本は独立できた。やっぱり国際関係の中でのものを考えるという視点がわれわれにも今要るんじゃないかと思うんですね。

荒尾精は、これは銅で作った製品ですけど、こういう商品見本をいっぱい集めてきてその本の中に入れてる。なぜか。今の政府は欧米志向だけれど、隣の中国には日本と貿易できる多くの製品、あるいは原料がある。もっと貿易をすることで日本も中国も共に経済成長ができる、という図録です。それを作った。日本人もそれを見たわけですね。その荒尾精からスタートした系譜もプリントをお配りしてありますので、あとでまたゆっくりご覧いただいたらと思います。日清貿易研究所を作り、それを東亜同文会が日清戦争のあとまた新しく作ります。東亜会と同文会。同文会のほうに近衛篤磨公が来られたわけですね。そして教育文化事業を始めましょうというわけで、東亜同文書院ができあがってきたわけです。

これは日清貿易研究所時代の入学式です。学生諸君の顔を見ると今の学生諸君とえらい違うんですね。だいぶ大人びております。これもそれぞれの時期の写真をいろいろ集めたものでありまして、中国でそういう学校が開かれていたということが裏付けられます。これは当時の日清貿易研究所のスタッフですね。教員や事務職のスタッフの

人達です。最初に日清戦争が終わった直後、東京同文書院というのを東京に作ります。これも近衛篤磨公の敷地の近く、目白に作ったわけです。多くの中国人が日本へ来て勉強します。日本も今度の戦争でアメリカに敗れたので、戦後日本人がアメリカへ大挙して留学希望がありましたね。それと同じように当時日本に、多くの中国の人が留学生として来日したわけです。そういう人達が、また後でちょっと出てくるかも知れませんが、本国へ帰ってのち県知事になったり、各省の省長になったりして、日本的な政治をやっている時期があるんです。そういう中国へ影響力がありました。それから朝鮮も李王朝の時代、庶民は教育を受ける権利がありませんでした。ここに3つ学校を作る。そして東亜同文書院を中国との貿易取引実務者を養成するために、いわゆるビジネススクールとしてオープンします。そして日中戦争時代に入りますと北京経専とか北京工専とか東亜工専とかいうような学校も東亜同文会が吸収合併して、大きな教育ネットワークを作っていたわけです。そのほか地元の中学生の人達に日本語を教えたりするような学校も作りました。

これは最初の東亜同文書院の授業一覧です。教授とか助教授とかありまして、どういう先生が担当して、いつからで、どんな科目をとったか。まあ最初ですからそんなにスケールは大きくないですね。これを見ても分かりますように、中国語と商業関係、貿易実務関係のビジネススクールだったということが分かります。スパイ養成学校とかそういうようなことは決してなかったわけですね。これは東亜同文書院の出身者です。アンケートの時にやったんですね。名簿から作れば一番簡単だったんですけど。最初は各県から2人ずつ、県費生という形で入学します。だから各県が2人ずつ給費生を送るんですね。給費生でやりますと授業料は只です。で、お小遣いが週1ドルもらえる。当時授業料が只の学校は軍関係の学校と師範学校だけでした。経済界に出ていこうという。当

時はまだそんなに進学率が高くない時代で、勉強したくても断念した人達も多かった。そういう人達にとっても救いの神様の存在だったように思います。全国各県で非常に激戦でした。たった2人の枠に、たとえば福岡県なんかやっぱり九州に近いから、毎年100人ぐらいの志願者がいる。そのうちの2人しか合格しないというんで、書院も途中から私費生、授業料を個人で納めるんなら30人ぐらい入れましょうというわけで、枠を30人増やしたわけです。その時にやっぱり都会の人達が多くなった。東京で試験をやる。30人の合格者に志願者は3,000人いました。100人に1人。これもなかなかの激戦でした。学校の運営の仕方のベースに、選び抜かれた方々を各県から、という目標がありました。各県から選んだということが1つの大きな特徴です。そういう点では上海の学校なんですけれど、平等に各県から学生が集まった。しかも当時の上海は国際都市でしたから、東京や大阪の比ではありませんでした。そこへ旧制中学ですから17~18歳の若者が国際都市上海へいきなり入るんですから、仰天したことも多かったと思うんですね。そういう形で上海へ行ったわけです。

何で入学したのか。夢は何か。これは卒業生が1,400人ぐらい（全部で5,000人卒業したんですけど）になった時にアンケート調査をしたんですけど、「中国で働く」「骨を埋める」「日本と中国、アジアのために」、「中国人のために」、「中国を見たり学びたい」、「中国語を学びたい」、「事業者になりたい」、「アジアで働きたい」、「外国で働きたい」というようなことが、大きな夢として語られています。卒業生の中にはいろんな人がいます。これは先ほど言いました山田兄弟のお兄さん。津軽藩弘前の方です。広東省惠州で「清国を倒せ、あれは漢民族ではない、満州族だ。中国の土地を漢民族の手に」というような運動が起こりまして、音頭をとったのが孫文です。孫文も若くしてハワイで、お医者さんになる勉強をしたんです。ハワ

イから中国を見たらこれは非常に異常だと感じたんでしょうね。もし孫文が中国で育ったら、独立運動はなかったと思うんですよ。外側から中国を見たっていうことで、そういう気になった。それに賛同したわけですね。それで惠州に駆けつけて戦死をしたわけです。だからあとで孫文が山田良政を悼んで碑を作ったり、葬式に出てきたり、いろいろしたんですね。その息子さんの純三郎がお兄さんのそれを悼んで、孫文もそれを受け入れて秘書になる。このツーショットは中国のほうの孫文の伝記なんかでも採用されています。そしてその息子さんの順造さん。この方も書院の卒業生ですが、お父さんのところに秘書でたくさん集まった資料をベースにして孫文博物館を作る夢を持ったんですけど、身体を悪くされて、一切の資料を愛知大学に寄贈していただいたんです。それでわれわれもそれを受けて資料展示館を作っています。だからもし西のほうへ行くチャンスがあったら、豊橋で1度降りていただいて、われわれの大学の展示施設がございますので、今日よりはたくさんの展示を見ていただけたと思います。そういう経過がありまして、われわれのほうも東亜同文書院大学記念センターも含めた展示施設をオープンしたわけです。

この方は日清貿易研究所の卒業生で白岩龍平という有名な方です。主に揚子江のルートで船を航海させるのに成功した人です。林出賢次郎という方は2期生なんですね。1901年オープンですから、2期生は1902年に入ったわけです。この方は日本人として最初のシルクロード西域のほうの調査をやった人です。日英同盟が結ばれた直後、ちょうど日露戦争が始まったその直後に、西のほうにロシア勢力がどのくらい入ってるかというようなイギリス政府からの調査要請がありました。当時日本は一切中国に情報網を持っていませんでしたから、外務省から根津院長に要請があり、このあと5人の卒業生が、2年間現地へ行って報告をしたわけです。5人の方の詳細な記録がありま

して、それによって当時の西域の様子が非常によく分かります。2年間死ぬ思いの、マラリアや熱病にかかったりしましたけれども、この方は地元のモンゴルの王様から招請を受けてまた出かけました。足で歩いてですよ、今だと北京からはジェット機で3時間で行っちゃうんですけど、行きに1年、帰りに1年。大変でした。この大倉氏は大きな製紙会社をやった方です。今横浜にその記念館があつて研究事業をやっています。中山優という人はやっぱり東亜同文書院の卒業生ですが、授業にはほとんど出なかったという逸話が付いてます。図書館で全部自分で勉強したんですね。だから正式には卒業できなかったんですけど、後に満州に建国大学ができた時にその教授として招かれて、リーダー的存在になりました。この方（清水董三）も北京でいろんな学校教育を運営された方。石射猪太郎さんという方も東亜同文書院の卒業生で、外務省の東亜局長をやられて、軍部の向こうを張って平和主義で頑張ろうとした人です。『一外交官の日記』でしたか、そういう本が出ていて、当時の様子が非常によく書いてあります。

今日も外務省に入られた小崎先生がおられます。小崎先生どこですかね。ああ一番前におられます。最後の頃の書院の卒業生で、愛知大学も卒業されて、外交官としてずっといろんなところで大使として活躍された人です。それから宗方小太郎、田中と、武勇伝で鳴らした方々であります。この田中氏は戦後山梨県の副知事をやってたんですけど。一方中華学生部に中国人の学生の人も入ってきて、いろいろ活躍したり、あるいは途中で共産党とつながったり、戦後の中国で活躍したり苦労したり、いろんな人がおられます。そういうようなところももう一方の面としてございました。ちょっとこの辺の細かい説明は省きますけど、この2人は猛烈に勉強した方として有名です。これは大城さん。沖縄におられます。作家です。沖縄の地理学の先生にお願いしてご紹介いただいて、いろいろ書院時代の話をお聞かせいただきま

した。そういう作家方もおられます。どういう世界で活躍されたかと言うと商社がやっぱり一番多いですね、ビジネスマンが。当時の、今も大きいですけど三井とか三菱とか大倉とか古河とかですね。運輸では先ほどの日清汽船。今では中国関係の会社はありませんけど。それから大きな紡績会社。金融機関。横浜正金銀行というのはけっこう中国に進出しておりました。まあ今はありませんが朝鮮とか台湾、満州中央部、これは満州国ができた時に貨幣を初めて統一した。中国は貨幣がバラバラでした。満州で初めて統一しました。報道の世界も、これはほとんど向こうの新聞ですけど、こういうような形でたくさん就業しておられます。日本でも皆さんご存じの新聞社が並んでいます。それから外交官。先ほどの林出さんもそうですが外務省に入られて、満州国皇帝溥儀の秘書をやった方です。学界。研究者としても多くの人が登場しました。戦後でも大学の先生になった方が84～85人おられます。

今度は山形県出身の東亜同文書院への入学期別入学者数です。判明分だけです。なかなか細かいところまで分かってないところがあります。2期生から入ったんですね。1期生はどうもいなかったみたいです。3、5、6、9とところどころ空いています。20期は非常に多いんですけど、これは先ほどの私費生が解禁された時ではないかなと思います。3人はちょっと多い時なんですね。これは県が大盤ぶるまいをして、おそらく3人得点と同じだったのか、落とせない、差が付かないというようなことがあったんでしょう。だいたい2人ないし1人ぐらいで入学しております。判明分だけだと36人おられます。しかしそれ以外にも明らかに山形だと思う方でもちょっとおられますが、きちんとしたものがないので計上していません。だからおよそ40人を超える人達が山形県から入っておられます。これはその出身地です。これが山形県ですね。これ米沢です。隣の高島。山形市。鶴岡。酒田。この鶴岡と南のほうですね。

米沢は4人判明しました。ほかにおられるかも知れません。それから高島の出身者がえらく多いんですね。ここはどうしてだろうなというようなことはまだ私には分かっていませんけれど、けっこう勉強する方が多かったのかなというふうに思います。やっぱり一番多いのは山形市でしょうね。しかし全体としては県南のほうがけっこう多い。あと旧制中学がそれぞれあったようなところから何人か出ておられます。そんな形です。

米沢出身の人達は個人情報の問題があるかも知れませんが、思い切って名前を出ささせていただきました。甘糟四郎といった方、この人は満鉄資源調査会、それから東洋運輸の社長になってます。それから片倉次郎っていう同じ20期（が多い）の方は上海にあった金沢洋行。「洋行」っていうのはまあ今の日本で言うと株式会社。近藤了次郎という方は日本足袋株式会社。これはブリヂストンですね。それから佐伯幸夫っていう方は上海紡績株式会社。これも大きな日本の資本の会社でありました。高島出身の人はこういうお名前。五十嵐富三郎、石川宮次、後藤貞次、原忠男など。5人なんですけどどういうふうになったか分からない人もおられて、4人しか出せませんが、上海の倉庫を經營したり、三井洋行、大原社会問題研究所、これは大阪にありました。五十嵐商会とか大興実業。

山形出身者は6人いました。東京日日新聞とか山形商工会議所、トヨタ自動車販売とかですね。戦後は山形市役所に入ったり。この方は地元で有名な方じゃないかなと思います。上海銀行から満州中央銀行、山形相互銀行、それから今日カメラを持ってこられた山形放送の方がおられますけど、その取締役をやった佐藤彦次。村井芳衛さんという方は満州国産業部。井上さんは先ほどの満州中央銀行。それから鶴岡出身の人は5人ですね。長崎高等商業専門学校の教授だったと思います。あと満鉄関係ですね。こういう方々がおられた。大陸でいろいろ活躍された方は戦後大陸だからと

いうわけでネガティブに捉えられてしまって、その人達の人生、いろいろ活躍したのに浮上してこないというのがあります。まあ本間先生もある意味でそういうところがちょっとあって十分評価されていないように思うんですけど、そういうところへもう1回光を当てて、見直していくというのは重要なことだと思います。

それから今尾さんという42期の方は、インドネシアの独立戦争に参加して、インドネシアで国籍を取って、現地で事業を展開したという、そんな方もおられたんですね。こういう方も世の中ではほとんど知られてないと思います。まあいろんな方々が活躍されております。

ところで先ほどのシルクロードのほうで調査をやったっていう方は、結果的に外務省から、イギリス政府に対する面子が立ったということもあったんでしょ、書院に3万円寄付をしたんです。その3万円で各学生が各地に旅行できる費用3年分に当たったんですね。じゃあ3年間、学生の要望も強いしやってみようというわけで、ここで初めて東亜同文書院の人達は中国の実態を知らなくちゃいけないっていうので調査に入りました。それまではお金がなくて修学旅行でした。みんな一斉に船に乗ったりしたわけです。これは先ほどのシルクロードへ行った人の1人ですね。波多野養作という、八幡製鉄ができる直前の、九州の八幡中学の卒業生です。柔道部をやっててやっぱり選ばれたんでしょかね。こういう方です。みんな弁髪ですね。頭を剃って後ろへ髪の毛を垂らしています。中国人になりきって写ってます。この方がその波多野養作っていう人で、1人です。5人行ったんですけどバラバラに行ったんですね。出発してまもなくロシア側には何か日本人の変なのがあるらしいという情報が伝わったようで、あっちこっちで追いかけられたりするんですね。病気になったりマラリアにかかったり。戦前の中国にはマラリア蚊がいました。日本が温暖化しますとマラリアが気になりますけど。1週間記

憶が無くなったりしております。馬車に乗ると地面が悪くてガタガタ道なのですぐ痔になってしまう。そういう苦しんでるのをヨーロッパ人の宣教師に助けてもらって、ヨーロッパ文化のすごさというのを実感するわけです。砂漠ですから夏は暑くて旅ができません。夜歩きます。それから冬は山が凍ると川が溶けて流れてきませんから簡単に沢が渡れるんですね。そういう時に旅をする。非常に苦勞をしてたんです。これが波多野養作という人です。まあこんな形で卒業後は炭鉱会社を中心に勤めておられますけれど、日中戦争が始まった時に自殺をしてしまいます。せつかくわれわれが一生懸命中国との関係をやってきたのに軍部が潰してしまった。「軍部の馬鹿野郎！」と言ってピストルで自殺したというのを娘さんから聞かせていただきました。

これが先ほどの西域への各コースで、これが成功したことが、東亜同文書院が中国各地へ調査旅行に行く原点であります。これが先ほどの林出賢次郎さんです。もう1回向こうへ行って先生になって、現地の学生諸君を教えた。こういう頭陀袋を持って。だいたい2人から5～6人、3か月から6か月、中国各地を歩いて、後には東南アジアの旅行に入ります。1台だけカメラが与えられて、そのカメラで当時の貴重な写真が撮られました。ほとんど足で、中国を肌で、身体で感じた調査旅行。これが非常に重要です。戦前多くのインテリの人達も中国へ行きますけど、ほとんど都市で生活をしていて、農村にはほとんど行っていません。当時中国は農村の国でしたから、農村調査をやったということは非常にそういう点では今の中国のベースと言いますか基底部分が分かる。これは出発風景です。これは上海の港から。これが展示にもありますがビザであります。非常に大きいですね。まあリベラルな学校でしたから日本の学生はほとんど詰襟の学生服ですけど背広で洋風スタイルですね。調査旅行では、卒論になる調査旅行報告書と併せて、途中の道中記、日記も書き

ました。なるべくあっちこっち見て目的地へ行くというのがよく分かります。これは満州地域の調査ですけど、なるべくあっちこっち回って目的地へ行く。

当時は地図がありませんでしたから自分達で足の歩幅で地図を作った。歩幅の尺で地図を作ったのです。これは潼関の写真。「箱根の山は〜函谷関」という、そういう雰囲気のところ。この写真の真ん中は軍閥のトップです。これもやっぱり日本へ留学した人なんですね。軍閥って言うと泥棒の大親分みたいなイメージですけど実はそうじゃなくてインテリです。民国中国ができた時に中央は袁世凱からもう1回独裁政治をやって、それで地方軍閥が離反しました。各省を中心にこういうリーダーが自分の政治を執るわけです。バラバラになって軍閥のあいだで戦争が起こったりします。その中の日本へ留学した人は非常に健全な政治をやろうとする。山西省なんか特にそうなんですけどね。そういうところへ学生諸君も、そういう時は正装で会ってます。揮毫をもらって来たりします。これは内モンゴルのフフホト、今はまあ大都市ですけど、そこは砂埃の町。黄河を羊の毛皮袋で下ったり。これはその途中のルートピア。まだ日本のほうには開放されてませんが、黄河の中流で、見事な開拓地が広がっています。これも宣教師の人が指導して開墾したんですね。

国旗を持っていますけど、国旗を持ってないと安全でない。狙われるんじゃないかと。ナショナリズムの反映じゃないかと言うとそうじゃなくて、経験者の人達の話だと、これを持ってないと同じ中国人と思われて、何をされるか分からない。あとこんな形で旅行をした。これは東南アジアですね。東南アジアも隔々まで行って、当時の欧米の植民地を実感しています。その中で列強の植民地政策というものを肌で実感した。現地にたくさん日本人がいました。そういう人達はみんな地元の人達の信頼を得てリーダーになっていた。それを戦争によってみんなぶっ壊してしまった。だか

ら戦前は非常に親日的でしたけど、戦後は反日的に変わってしまった。戦争は非常に人々の感情を逆転させる悲劇であるということが言えます。まあこんな中国奥地の少数民族の絵を描いた人もいます。これは東南アジア、広東の軍人。これはベトナムの日本橋。日本人が室町時代に行って作った橋。ちょっと写りが悪いんですけど橋の上に建物がある。それからアンナンのお城。ベトナム戦争で少し壊れますけど、壊れる前の写真です。

満州に2年ほど行きました。満州事変を起こした時に、さすがに民国政府も2年間ビザを発給しませんでした。そこで学生諸君はやむなく満州へ行ったんですけど、おかげで満州を2年間、各県レベルで調査をすることができた。これは興安嶺の横断風景ですね。虎が出るところです。こういうところも歩いて横断してます。そして最後に編集委員会ができて大旅行を整理しています。これは収録された先ほどの軍閥の人達の揮毫です。達筆ですよ。だからインテリなんです。多くは日本に留学した人。そういう点ではやっぱり今の日本も中国の留学生達を大切に扱う必要がある。こうして調査旅行も次第にビジネスライクなものから、教育とか民俗とかいろいろなものに広がって、少しずつ総合的な中国研究に拡大していきます。しかし戦争が始まるとコースが限定されてきます。もっと限定されていくんですね。全体としては約700コース。各地別に見ていきますとこうなります。中国本土ですけど、展示場でも示してありますが、こういうふうによくのコースを彼等は歩きました。この旅行の功績は「自信が付いた」とか「中国語が理解できた」とか「中国を学んだことは大いに満足している」、そういう結果が得られています。

しかしながら戦後、著名な先生達が、中身をきちんと検討せずに書院のことに限ってはスパイ学校的な見方をした。したがって戦後の書院の人達は口を全部つぐんでしまいます。そういう不幸な時代がありました。しかし戦後の高度経済成長期

に最前線で活躍した人達が多いから、書院っていったい何だろうというわけで、「幻の名門東亜同文書院」の出身というのが長いこと定説で流れました。スパイ学校という見方についてどう思うか。「とんでもないことだ」というのが圧倒的に多い。また、書院から得たものは、「大いにあった」とか「中国の理解が進んだ」、「国際化」、「中国語」、「戦後に生きる力を与えてくれた」。まあいろいろございます。

これはいつも出す例ですけど、私がイギリスにいて向こうで講演した時に、書院生の大旅行を講演前に「グレート・エクスカーション」という形で東亜同文書院の学生がやったんだと言ったら、「グレート」がカットされて予告された。「日本人にそんなことができるわけがない。イギリスこそがグレートだ」と。だけど講演を聞いたあと、「やっぱりグレートだ」と言って評価してくれた。中国旅行と中国研究というんで、いろんなこういう形で実績が残ります。これもちょっと目で見ただけで。戦後、愛知大学から「中日大辞典」というのも刊行されました。これは書院時代にすすめていた作業で、14万枚のカードを作成し、中断したまま引き揚げてきた。本間先生はすごいですね。日中関係がまだ何の交渉もない時に、あれを返してくれと中国政府に言ったんです。それに応えたのが周恩来。周恩来首相も日本に留学してた。東亜同文書院というのを知ってた。それで郭沫若を使ってこれを返してくれたんです。で、愛知大学が戦後時代が変わりましたから、その内容を再編するとともに簡体字用に活字を組んで作ったのが第1版です。今から20年前に初版が出ました。5,000冊中国へプレゼントしたんですが足らなかったんですね。中国では海賊版がいっぱい出ました。悪い紙で3倍か4倍ぐらいの厚さの実はたくさんの本を各地で見たことがあります。今度第3版が出ました。ぜひ興味のある方はご覧ください。

あと書院から調査研究作品がたくさん出ます。

これもそうです。新しい省別全誌。こういう雑誌も。学術誌に変身していきます。つまりアカデミーの世界へ行っただけですね。それで大学に昇格できた。さらに多くの書物が刊行されます。私はとくに書院生の大旅行研究をしてきた。こういういろいろな手書きの原稿を活字化してきた。原文はなかなか読むのが大変です。しかし、ほんとにきちんと書かれてるかどうか。この研究をする上で私は学生達が苦労した時のコースをたどって、現地で確認をしました。きちんとできてることによってこの研究を始めるようになりました。旅行記を見るといろんな復元作業ができるんですね。これは土地利用であるとか。これは気候の条件。毎日晴れとかですね。それ以外の多くの情報を知ることができます。

これは旅行中にいろんな貨幣が各地で記録され、それを分布図につくり、同じ貨幣をくくりますと経済圏が分かる例です。今の中国の基礎部分です。これは言葉。いろんな言葉があります。同じ言葉をくくるとこれから文化圏が分かります。合わせますと非常に強い地域的なまとまりが出てきます。これが今の中国を支えています。あと阿片用のケシを作ってる場所。北西部です。強盗団の集団、土匪、強盗団が県境、省境にたくさん出てきます。それから反日運動。これも細かく説明すると時間がないので省きます。こんなことが分かりました。排日・排英・排外。ナショナリズムが1925年に上海に起きた事件がきっかけで全土に広がる。これによって中国の人達が初めて中国を意識したんじゃないでしょうかね。毛沢東が出現してくるその背景を作った事件だったと思います。書院の人達はそういうのに各地で出会って、石をぶつけられたり、議論をふっかけられたりで大変でした。それでこういう彼らのデータはそういう意味で非常に重要です。これは軍閥の争いの勢力図です。しかし軍閥の人達は同時に各都市の都市計画や図書館など、都市を近代化させた。中国の人は公共文化というのはあまり作らなかった



のを改革したりした。満州の話は時間の関係で省きましょう。

以上から中国は1930年ぐらいまでの資本主義の波が、戦後空白になります。で、改革開放でもう1回これが復活してくる。モデルがこの1930年代しかありませんでしたので、ここの研究が非常に今の中国にとっても意味があるということが分かります。本間先生が最後の学長として非常にご苦勞をされたわけです。

本間先生以外にも少し連携プレーをした人達もおられますが、本間先生が身を削り、土地も削り、お金も工面したから、愛知大学を作ったわけです。地元の方々の豊橋の市長、経済界の人達からも受け入れられて愛知大学を作った。海外引き揚げ大学として愛知大学は誕生しますが、途中から文部省の命令もあって、東亜同文書院以外の人達も受け入れます。大学の予科は高等専門学校、学部のほうは大学から来ますから、多くの大学、海外85の高等学校や高等専門学校および大学から来ています。これが新しいキャンパス。その様子を見ながら愛知大学を作ろうという本間先生ですね。サツマイモがたくさんつくれそうです。まあこんな感じで読みとれます。中国とのつながりも特筆されます。これは孫平さん。今日も展示してあります。地元の新聞にもこんな形で紹介されております。海外からの研究者ともシンポジウムをやったりしました。本学へ来ていただきますとこんな形の展示室をみることができます。

というわけでちょっと時間オーバーで申し訳ないことをしました。一応こんな形で私の今日のお話、ちょっと最後走りまわりましたが、終わらせていただきます。どうも。

【司会】 ありがとうございます。

【参席者】 純三郎さんをね、息子さんって言ったんですよ。弟さん。

【藤田】 ああそうでしたか。失礼しました。先ほ

ど山田兄弟の純三郎さん、兄良政の弟さんなんですけど、息子さんと言ったようで、ちょっとミスをしました。すみません。

【司会】 藤田先生ありがとうございました。時間が少し超過しまして申し訳ございません。ではまた藤田センター長より閉会の挨拶がございますので、よろしく願いいたします。

【藤田】 どうも今日は長時間にわたりご清聴いただきまして大変ありがとうございました。私の発表がちょっと最後長くなってしまって、ご質問があったら承ろうと思ったんですが、その時間がとれないということになりまして、もし何かご質問等がございましたら、山田先生、殿岡先生もいらっしゃいますので、直接にお尋ねいただければ幸いです。われわれの展示会は明日もやっておりますし、殿岡さんには手相鑑定もしていただくということになっております。ご興味のある方は明日もいらしていただければ。一番奥の和室でさせていただきます。

以上、東亜同文書院から愛知大学への流れを今日はわれわれ3人でご説明をさせていただきました。特にそのキーパーソン、軸になったのが本間喜一先生であります。そういう点でわれわれも置賜の、山田先生が先ほどおっしゃったこの風土に、改めて感謝をさせていただきたいと思っております。今後ともひとつ、愛知大学と、この地方との交流がうまくできますことを期待しております。本当に長時間にわたりましてどうもありがとうございました。これにて終わらせていただきます。

【司会】 ありがとうございます。これをもちまして講演会「米沢が生んだ本間喜一をめぐって」を終了させていただきます。皆様長時間にわたりご参席くださりまして、誠にありがとうございました。明日も小ホールにて展示をしておりますので、また明日もぜひとも会場に足をお運びいただけたら幸いです。